慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	越智武臣著 近代英国の起源
Sub Title	
Author	安元, 稔
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.9 (1966. 9) ,p.1021(111)- 1022(112)
JaLC DOI	10.14991/001.19660901-0111
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660901-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本書で論じられ、主張されていることは、日本という立場からいって、低開発国問題にとり組み・アプローチする際におけるいわゆる確立された常識ないし通念となるべきものであり、合理的な思考を行ないうる人々によっては、当然支持されるべきものである。

勿論、積極的に低開発国とくにアジア問題にとり組む場合、日本側への一時的なマイナス、構造転換にともなうコストが生ずることは事実であるが、長期的に考えればより合理的な資源配分が行なわれ、経済成長を一層促進することになることは明らかであり、我々はより長期的に考慮し、何等かの積極的措置によって短期的困難を克服していくことが必要であるように思われる。

ただ本書は、すでに発表された論文をまとめたものであるので、現在の時点において考えれば、大幅に書きあらためる方が、より有益ではないかと思われるものがいくつか目についたし、また本書に断片的に言及されている理論的研究をさらに体系的かつつっ込んで行なうことが必須のことと思われる。

低開発国問題とくにアジア問題に関心ある人々に広く一読をすすめたいし、むしろ手軽によめるにもかかわらず、読了したあとに何かが必ず残り、いろいろと考えさせられるといった意味において貴重である。我々は本書にかかれた内容を通念・常識化して行くとともに、これを共通の基盤として、一層の研究・展開をこころみることが大きな課題であろう。（ダイヤモンド社・一九六六年六月刊・B6・二三九頁・三六〇円）

—深海博明—

＊　＊　＊

西村孝夫著

『インド木綿工業史』

インドの研究は、従来その固有の文化、慣習等の現象面に主として関心が集められて来た。これは十六世紀以来東洋に進出したヨーロッパ諸国のインドとの接触が外面的なものであったからである。インド社会の内部との交渉が必要になったのは十八世紀後半のことである。しかしそこでヨーロッパ人の目に映ったインドは、古代そのままのような停滞した社会であった。従ってその後のインドに関する研究の努力も、主に古来の慣習・制度に向けられることになり、今日までその経済史的研究の大部分は、ヨーロッパ的進歩に対するアジア的停滞として経済の後進性を強調するものとなった。本書は、この「ヨーロッパ的普遍主義史観」に基いてインドの経済をとりあげる態度を批判して書かれている。そして最も古くからインドの社会に根をおろし、十九世紀以降のインドの荒廃と、現代の経済自立問題の焦点となっている木綿工業をとりあげて、これをインド全体の社会機構・経済構造の中で追求して行く、実証的立場が主張されている。インドの停滞の条件を明らかにするには、ヨーロッパ資本、特にイギリス資本が、インドにおける綿業と農業が古い形で結合していた社会構造を破壊して行った過程と、その限界の分析が必要であると考えられているからである。

本論で、インド木綿工業の原型は、それが最盛期にあった十六—十七世紀のものにおかれる。ヨーロッパ諸国と直接の接触がなかったそれ以前の時期については、前史として扱われている（第一章）。原型である綿織物生産の構造は、生産技術と共に直接生産者であるインド農民の共同体とそれを規制するカースト制の関連において検討され、商人や王侯の支配を経る綿製品の流通機構が分析されている。この原型はヨーロッパ資本の作用を捨象して求められたのである（第二章）。次いでこの原型がヨーロッパ資本との接触により、どのように変化し破壊されて行ったかが追求される。ポルトガル、オランダとの接触（第三章）。それにつづくフランス・イギリスとの接触（第四章）。イギリス資本の本格的進出である東インド会社によるインド手織綿布生産者の支配、イギリス産業革命との関連、その後のイギリスの対インド政策の変更と、インド綿工業の没落過程（第五章）、イギリスの支配下においてイギリス綿工業の為の原料供給国、製品の販売市場となったインドの経た社会経済構造上の変化（第六章）という順序である。第二次世界大戦とその結末がインドに及ぼした作用は現代の問題として、改めて技術・生産構造・市場・政府の経済政策の諸点にまとめられた（終章）。

補論として、二つのインド社会に関する業績の検討が行われる。一つはジェームズ・ミルと東インド会社の関係、及び彼の『英領インド史』に関するものであり、他はウェーバーのインド社会論に関するものである。後者ではインドの社会構造研究におけるウェーバーのカーストや宗教の側からの分析をとりあげて、それが十七世紀以前のインド社会に対しては優れたものであるが、それ以後の停滞性に関しては十分なものでない点の批判を行っている。

本書はインド経済史の実証的研究の方法として、発展性のある好著である。（未来社・一九六六年三月刊・A5・二二〇頁・一五〇〇円）

—三宅昱子—

＊　＊　＊

越智武臣著

『近代英国の起源』

著者は、先年物故したロンドン大学の碩学、R・H・トーニー教授に師事され、わが国のいわゆる「ジェントリー論争」に活発に参加されて来た方である。本書は、従来の通説、「近代の典型」としての英国を、国民史という枠組の中で再検討し、近代英国のトレーガーが如何なる社会層に属したかを究明せんとしたものである。

第一章「政治変革の進展」、第一節「国民国家の覚醒」において、著者は、近代英国の国民国家としての成立を、一五三〇年代の一連の政治変革の中に求める。この時代の国際政治、殊にイタリア戦争が、英国国民の対自的な国家性の認識を呼び醒したからであり、この戦争が、対ローマ政治の破綻を伴っていたが故に、教皇権に対する国家教会の定立、即ち宗教改革を余儀なくさせたからであった。近代国家の前提条件としての行政制度の転換点も又、一五三〇年代であった。

第二節「絶対王政の風土」は、これ迄の「絶対主義論争」を実り多きものとするために、新たな視角、即ち絶対君主エリザベスとそれをとりまく宮廷の派閥抗争の中に、絶対王政政治の構造を見ようとするものである。更に、こうした中央政治と地方政治を結ぶものとしての議会のあり方が検討され、根強く残る地方主義、州の重要性が強調される。州の政治の実権を握っていた階層こそ、地方名望家、ジェントリーであった。

第三節「革命政治の底辺」では、いわゆる「清教徒革命」について、革命史には不可避である党派的解釈と時代の推移によって変転する革命像とが回顧され、最近の英国史学界の顕著な動向である地方史研究に即応しつつ、革命における地方と家族の問題が、ノッティンガムシャーの一寒村での現地調査をもととして解明されている。

第二章「社会経済の変貌」は、「英国の近代」が、何時訪れ、それがどのような変化を生んだかを、全体像として描出することに費されている。第一節「国民経済の屈折」において、著者は、十六世紀前半の未曽有の好況と後半の不況の、英国商工業に与えた影響を考察し、「絶対主義」の政策と呼ばれているものが、こうした経済変動、就中、世紀後半の不況の解決の仕方であるとするのである。

第二節「農業革命の進展」においては、前節で展開された十六世紀の経済変動に伴う農業分野の変革がとりあげられ、この変革が、従来から支配的な学説であった「ヨーマンリーの上昇」をもたらしたのではなく、全体として見れば、ヨーマンは、近代英国のトレーガーでもなく、まして「未来の産業の将師」でもなかったとされるのである。ヨーマンが近代英国形成の過程で埋没を余儀なくされた階層であったとすれば、近代英国の真の担い手は、如何なる社会層であったか。これこそ、著者の特筆する社会層としてのジェントリーであった。

「ジェントリーの勃興」が一方にあれば、他方にヨーマンリーの没落がある。近代英国国民文化の型があるとすれば、それはジェントルマン・イデアールであった。第三章「国民文化の生成」は、近代英国国民文化のパターンについての著者の優れた試みである。ジェントルマン・イデアールは、従来の騎士道倫理と外来の人文主義の習合の産物であった。他方、清教主義は、すぐれて英国土着の文化であった。多くの清教徒達は、十六・十七世紀の経済、社会変動の過程で路傍に置き去られた。英国文化は、両者のシュバンヌンクの中に展開し、革命後、両者は合成され、合理主義的経験的思考の流れ、経験論として結実したのである。

本書は、その歴史研究のパースペクティヴにおいて、又最近の英国歴史学界の動向を知る上で、極めて優れた研究書である。（ミネルヴァ書房・一九六六年三月一日刊・A5・四七五頁・二一〇〇円）

—安元　稔—

＊　＊　＊

天川潤次郎著

『デフォー研究

—資本主義経済思想の一源流』

著者はこの書物を第三部第九章に分けている。第一部は「デフォー——時代と思想——」であり、その第一章は「産業革命前夜のイギリス経済」、第二章「デフォーの生涯とその論著」、第三章「経済思想」、第四章「政治思想」とに分れている。第二部では「経済時論」、第五章「英・蘇合併問題（一七〇七年）」、第六章「英仏自由通商問題（一七一三年）」、第七章「南海恐慌問題（一七二〇年）」となっていて、最後の第三部では「資本主義のヴィジョン」、その第八章「資本主義のヴィジョン」、第九章「イギリス経済の構造」となっている。全体を通してみて《ロビンソン＝クルーソ》物語の筆者としてのデフォー一個人の問題から、英国ジャーナリズムの開拓者の一人としての、また政界に出入し政治経済の問題には関心が深く、内外商業についてのすぐれた見識の持主であり、また著者はこの本のいたるところで述べているが、終始一貫中産階級的であり、非国教的である近代イギリス社会の典型ともいうべきデフォーの姿および当時のイギリスの諸問題を扱っている。更にデフォー個人について言えば、彼の著作は小説、パンフレット、政治および経済評論、旅行記、歴史など非常な数にのぼるが、その中で最も注意すべき著作は《事業論》（An Essay upon Projects, 1697）、《ロビンソン＝クルーソ》（Robinson Crusoe, 1719）、《イギリス商人大鑑》（The Complete English Tradesman, 1725）、などである。

デフォーの生れた一六六〇年のイギリスは、社会経済史的に見て一つの大きな転換期でもあった。一六四九年から一六六〇年の間における空位時代はいわゆる世界最初の『市民革命』をとげたもっともイギリスにとって輝かしい時代であった。とともに、それはこれより後、イギリスの数世紀にわたる繁栄の源ともなった商工業の担い手たる中産階級の地味な、それでいて確実な出現の時期でもあった。政治的にはチャールズ二世の王政復古が成しとげられ、共和制に終止符が打たれたかのように思えるが、これは過去への復帰を意味しはしなかった。かんたんにいえばイギリス革命が変革したものは、封建的諸制度のうちで、長老派＝商業資本の障碍になるものを排除し、手段となるものをのこして、イギリス資本主義が他にさきんじて本源的蓄積にすすむ道をひらいたのである。ここにおいて重商主義が典型的におこなわれたのは名誉革命（一六八八年）後のイギリスにおいてであり、この初期ブルジョア国家によって遂行された原始的蓄積の核心をなす経済的課程はつぎのごとくである。㈠、康価労働力の強力的な創出とその技術的な訓練。マニュファクチュア期を特徴づけるおびただしい浮浪者の就業強制、懲役場や孤児院でおこなわれたかれらの強制的陶冶、またさまざまの規制による賃金圧下や労働者確保のための移住禁止、更に外国熟練職人の来住奨励と自国熟練職人の移住禁止。特に歴史上著名なものとしては、エンクロージア運動の破壊性があげられる。㈡、さまざまの形における貨幣財産のつかみ取りとそれを産業資本へ転化するための諸条件強力的創出。なかでもイギリスの海賊によるスペインの銀船隊や植民地の略奪が、イギリスの原始的蓄積にとってはたした役割は無視できなかった。

最後に著者は、工業よりも商品の販売に一層興味を持ち、貿易、植民こそイギリスを興すものと考えたブルジョワジーの代弁者たるデフォーは、明らかに大英帝国膨脹論者であり、自由主義的な帝国主義者であったのである、と結んでいる。（未来社・A5・四五〇頁・索引三三頁・二、〇〇〇円）

—原田敏彦—

＊　＊　＊

J・D・チェンバーズ著
宮崎犀一・米川伸一訳

『世界の工場

—イギリス経済史
一八二〇—一八八〇』

一八二〇年代から、いわゆる「大不況」がはじまる一八七三年恐慌にいたるまでの時期こそ、イギリスが世界の工場として産業的にみても金融的にみても、世界に君臨し繁栄にふけった時期であるといえるだろう。イギリスの産業界のみならず、世界資本主義の中心基軸産業であったのがイギリス綿工業なのであった。

従来、この時期の研究は、一八世紀後半の産業革命の研究及び、二〇世紀の現状分析的研究の間であって、必ずしもこの時代の総合的研究が充分に行われていたとは言い難い。一九二六年に公刊された、サー・J・クラッパムの大著「Economic History of Modern Britain 3 vols」がこの期をも俯瞰し、概説書にW・H・B・コートの「A Concise Economic History of Britain from 1750. to Recent Times (1954)」〔矢口孝次郎監訳『イギリス近代経済史』ミネルヴァ書房〕があるが、チェンバーズ教授